

あ と が き

“東南アジア研究”二巻二号をお届けする。御承知の如く、“東南アジア研究”は、季刊誌として年四回発行を建前としているが、三ヶ月に一回発行という定期的な形も、ともすれば諸般の事情により崩れがちとなる。本号も、当初は十二月未発行という事を考えたが、年末の繁忙を避けるため、若干操りあげて十二月二十日発行とした。従って、原稿の締切期限も、印刷、校正等の事情を考慮して十月二十日となった。その結果、前号との間隔が僅か一ヶ月という短期間となり、執筆者諸氏に多大の迷惑をかける始末となったが、何卒御寛恕賜りたい。

本号の内容は、東南アジアの総合的研究を意図する当センターの活動状況を反映して、民族、言語、原語文献紹介、比較法、水利、生物と、多岐に亘っている。地域的には、タイが圧倒的に多く、次いで、マラヤ、ビルマの順となっている。又、ターリング教授（クインズランド大学）からは、オーストラリアにおける東南アジア研究の現状に関する寄稿があった。尚、現地通信の欄には、棚瀬（マラヤ）飯島（タイ）水野（タイ）三氏の原稿が寄せられた。論文、報告と併せてお読み願えれば、幸である。

本号に掲載される予定であった西占貢教授、山本達郎教授（東大）本岡武助教授、鎌倉昇助教授四氏の原稿が、締切期限の都合で次号廻しとなった事を、お詫びする。季刊という形が軌道に乗るようになる来年度からは、編集事務上のかかる不手際は、避ける事ができると確信している。

原稿依頼から校正に至る一連の編集業務は、毎号、大学院生の諸君の協力によるところが大きい。本号の編集業務は、大野徹君（言語学専攻）に担当してもらった。多忙な中、協力を惜しまなかった同君に謝意を表したい。尚、次号（マラヤ稲作特集号）は、古川久雄君（農学専攻）、二巻四号は、坪内良博君（社会学専攻）に、夫々担当してもらう事になっている。但し、最終責任は、いずれも編集委員が負う。

通巻六号ともなれば、体裁は勿論の事、内容にも検討の余地が生じてくる。掲載された論文が、従来、独創的なものよりは、啓蒙的な性格のものが多かった事は、御承知の通りであるが、当センターとしては、目下、現地調査に重点をおいているため、その中間報告という形が多いのは止むを得ない。各調査担当者の研究成果は、“東南アジア研究報告”として、正式に刊行される予定である。

本誌は、東南アジアの研究を推進する一つの礎として、自然科学、人文科学、社会科学のいずれを問わず、広く各分野に研究発表の場を提供する事が大きな役目であるから、今後共、対象地域の別、研究分野の如何に拘らず、活潑な投稿を歓迎すると共に、有益な御示唆、並びに、建設的な御意見、御批判をお願いしたい。

本号の体裁は、従来の方針を踏襲するに止まったが、今後、新しい企画があれば、どしどし実施して行く方針である。尚、上野名誉教授の原稿は、当初“文献解題”に予定したものであるが、内容から判断して“論文”として取扱った。従って、本号には“文献解題”の欄がなくなったが、これは臨時的な措置で、次号からは復元される。

最後に、いつもの事ながら、中西印刷には、印刷上、種々の無理な注文をつけたにも拘らず、いずれも快く処理していただいた。厚くお礼申し上げます。（編集委員）